KCE

Kawaguchi Chamber Ensemble

川口室内合奏団

第４回演奏会

2020 年
2 月 24 日（月）
13:30 開場
14:00 開演

リリア
音楽ホール

ご挨拶

団長　山口尊実

本日は、川口室内合奏団第４回演奏会にご来場下さいまして、ありがとうございます。おかげさまで、第４回めの演奏会を開催することができました。重ねて御礼申し上げます。今回は、「４」にちなんだ曲を中心に構成しました。

前半は、バロックの世界をお楽しみください。いつものようにヴァイオリンのソロで幕開けです。バッハの魅力、ヴァイオリンの魅力をお楽しみください。次に、マルチェロのオーボエ協奏曲を、ニ短調ではなく、ハ短調でお送りします。演奏はやや（かなり？）難しくなるのですが、バロックの雰囲気が出てくると思います。そして、管弦楽組曲第４番です。これで「管弦楽組曲」チクルス終了です。「第 1 番」から「第 4 番」までの成立順を想像してみてください。

後半は、ハイドンの交響曲第４番と、同時期に作られた第 108 番、そしてモーツァルトの交響曲第４番くらいの（？）ト長調交響曲「オールドランバッハ」を演奏いたします。なかなか演奏される機会がないのですが、いずれも良い曲です。古典は初期の音楽をぜひお楽しみください。

Program

J. S. Bach　無伴奏ｳﾞｧｲｵﾘﾝﾊﾟﾙﾃｨｰﾀ第１番より
A. Marcello　オーボエ協奏曲ハ短調
J. S. Bach　管弦楽組曲第 4 番 BWV1069 ニ長調

＜休憩＞

F. J. Haydn　第 108 番 変ロ長調
F. J. Haydn　交響曲第 4 番 ニ長調
W. A. Mozart 交響曲ト長調 K.A.221（45a）"Old Lambach"

Johann Sebastian Bach

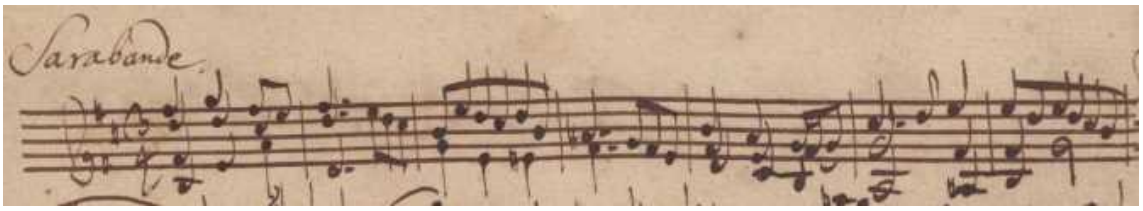
1685 年 3 月 31 日、神聖ローマ帝国アイゼナハ生まれ。宮廷オルガニストとして有名だが、実はヴァイオリンの名手でもあった。彼の父はアイゼナハの町の楽師として弦楽器担当であった。セバスチャンは父からヴァイオリンの手ほどきを受け、1703 年、最初の職であるヴァイマール宮廷楽師につき、ヴァイオリニストとして活躍した。1708 年には、オルガニスト兼ヴァイオリニストとしてヴァイマール宮廷音楽家として活躍していた。
その後、1717 年からケーテンの宮廷楽長の職に就き、多くの器楽曲を作曲した。1750 年 7 月 28 日ライプツィヒにて永眠。

無伴奏ヴァイオリンパルティータ第１番 h moll より
Sarabande - Double、Tempo di Borea - Double

1720 年に完成された無伴奏ヴァイオリンソナタ３曲とパルティータ３曲は、バッハ自身により「通奏低音なしのヴァイオリンのための６つの独奏曲　第一巻」という標題が付けられている。この「通奏低音なし」というのは、当時は例外的であった。ヴァイオリニストとしても活躍したヴァイマール時代に構想が練られていたこともあり、ヴァイオリンの技巧が存分に発揮されている。

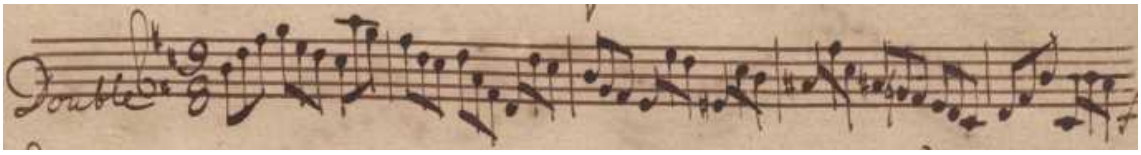
今日演奏する曲は、Allemanda-Double、Corrente-Double に続く２曲です。
（Double は、装飾的な変奏曲の意）

Sarabande（サラバンド）　3/4 拍子



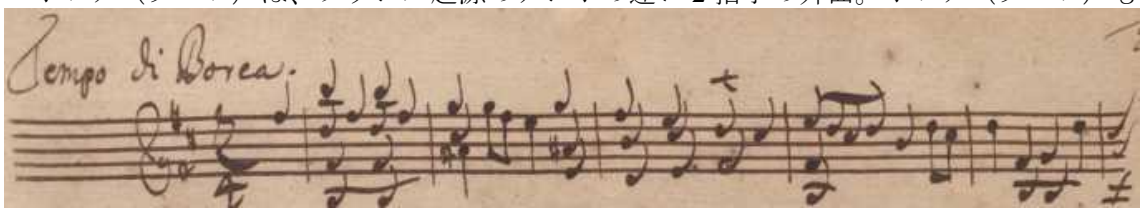
２拍目が強いスペイン起源のゆったりした３拍子の舞曲。重音がたくさん使われていて弦楽器独特の音の拡がりが感じられる。

Double　9/8 拍子　重音を分散和音にして、軽やかな雰囲気になっている。



Tempo di Borea　（テンポ　ディ　ボレア）2/2 拍子

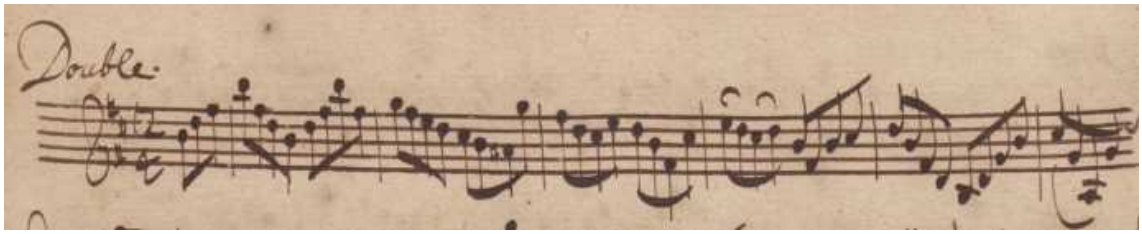
ボレア（ブーレ）は、フランス起源のテンポの速い 2 拍子の舞曲。ボレア（ブーレ）も



ガヴォットもテンポの速い２拍子の舞曲だが、両者の違いは、ガヴォットは１拍分のアウフタクトがあるのに対して、ブーレは半拍分のアウフタクトがあることである。そのことによりブーレの方が力強く感じられることが多い。（「管弦楽組曲」参照）

Double　2/2 拍子

分散和音の音域が広く、華やかで、力強くこのパルティータ第１番を締めくくる。



謎が三つ。

謎その１

なぜ、フランス語の Bouree（ブーレ）ではなく、イタリア語の Borea（ボレア）と書いたのか？

謎その２

通常、舞曲集の締めくくりには Gigue（ジグ）を使うのだが、なぜ Borea（ブーレ）を使ったのか？（ジグでは変奏しにくいから　という説もあるが……）

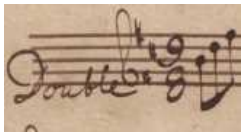
謎その３

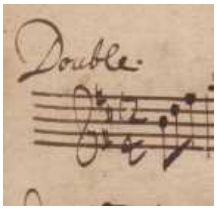
なぜ、わざわざ「～のテンポで」という言葉を付け加えたのか？

（重音がたくさん使われていて、実際にはブーレの速いテンポでは弾けないので、雰囲気を出すため、というのがもっともな説だと思われるが……）

おまけ

サラバンドの Double とテンポ・ディボレアの Double は最初の３音が同じなので、どっちがどっちなのか分からなくなる……かも……。





A. Marcello　オーボエ協奏曲ハ短調

アレッサンドロ＝マルチェロ（Alessandro Marcello）は 1673 年 2 月 1 日イタリア、ヴェネチアに生まれ、文学、哲学、数学、そして音楽と多方面に活躍した。しばしば「エテリオ・スティンファリーコ」（Eterio　Stinfalico）を名乗りいくつかのコンチェルト集を出版した。このオーボエ協奏曲は、バッハによってチェンバロ曲（BWV974）に編曲された[*1]。映画「ベニスの愛」（1970 年）[*2] で 2 楽章が使われ、脚光を浴びた。1747 年 6 月 19 日没。

原曲はニ短調（♭１つ）だが、今回は、１音低いハ短調（♭３つ）で演奏します。

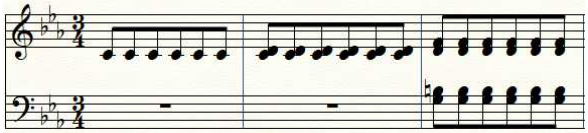
第１楽章

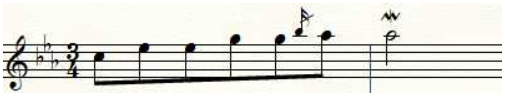
弦楽合奏のユニゾン[*3] で始まり、次いでオーボエがテーマを歌いだす。徐々に装飾が増えていくのも聞き所である。

リトルネッロ形式[*4] で、文字通り「小さな反復」を繰り返す。

第２楽章

2ndVn の単音で始まり、1stVn が重なり長二度の和音となり不思議な「不協和音」が響くき、Va と Vc が加わり、属七の和音となり、解決するとオーボエがメロディを奏でる。





このメロディの装飾をとってみると、右のようになる。

さらに単純化すると、ハ短調の I の和音の三音（ド-ミ♭-ソ）である。（上は、次の音を「先取」）

この、三和音の音符の間を埋めると、単純なハ短調の音階である！　音階練習は大事だ！

第３楽章

終楽章は、オーボエのソロ（＋ヴィオラ）で始まる。この楽章は前半・後半ともリピートし、後半には様々な装飾が入る（……はず）。

注

*1 youtube で聴くことができる。ぜひ聴いてみてください。（グレングールドの演奏も聴ける！）

*2 当時私はまだ小学生で触れることもなかった。現在入手不可能のようである。残念。

*3 ユニゾン（unison）の語源はラテン語の unisonus。「ひとつの音」。広義で、オクターブも含まれる。

*4 イタリア語の名詞 ritorno（「戻ること」、動詞は ritornare）に縮小辞 –ello がついた形。

「管弦楽組曲」　第４番 ニ長調 BWV1069

バッハは４曲の組曲を単に「序曲」（Ouvertüre）としていた。曲名に限らないのだが、一度広まってしまうと、“本来の正しい姿”に戻すのには相当の時間と労力がかかる。例えば、かつて、シューベルトの「未完成交響曲」は「８番」で、「グレート」が「９番」であった[*5]。ベートーヴェンは交響曲第３番を自身の手で「Eroica」と一度書いた後に消しているにも関わらず、「英雄交響曲」などと呼ばれた（ている）。「管弦楽組曲」もいつ本来の姿に定着するであろうか。（特に、この日本では。。。）

さて、「４つの序曲（管弦楽組曲）」は、１番から４番まで作品番号が 1066 から 1069 が付けられているが、その順に作曲されたのではないということは知る人ぞ知る「周知の事実」だ。チクルスが終了する今回、その順番を考えてみたい。

まず、J.S.バッハの３時代、Waimar（1708-1717）、Köthen（1717-1723）、Leipzig（1723-1750）を基本的知識として押さえつつ、また、ライプツィヒ時代にトランペットやティンパニを加えて演奏したということも考慮しつつ、次の一覧表を見ていただきたい。

BWV1066	BWV1067	BWV1068	BWV1069
ハ長調 C-dur	ロ短調 h-moll	ニ長調 D-dur	ニ長調 D-dur
序曲 4/4 - 2/2 - 4/4 クーラント **ガヴォット** フォルラーヌ **メヌエット** **ブーレ** *パスピエ*	序曲 4/4 - 2/2 - 3/4 ロンド サラバンド **ブーレ** ポロネーズ **メヌエット** *バディヌリー*	序曲 4/4 - 2/2- 4/4 **エール** **ガヴォット** **ブーレ** *ジーグ*	序曲 4/4 - 9/8 - 4/ 4 **ブーレ** **ガヴォット** **メヌエット** *レジュイサンス*
木管 trio	弦楽＋ Fl ソロ	弦楽合奏（「アリア」）	木管 trio

なによりも際だって異なるのが、管楽器のない「G 線上のアリア」で有名な BWV1068。そして、BWV1067 の Fl ソロのロ短調。BWV1067 のオリジナルは Vn ソロ（イ短調）であったという。つまり「中ふたつ」は弦楽合奏版[*6] だったのだ。さらに、BWV1067 のソロ楽器はフルートではなくオーボエだった[*7] ということも確からしい。（当時の楽団員の構成や曲の音域を考えてみれば確かにそうだろう。）この 1067 がもっとも新しいということは疑いの余地がないという。

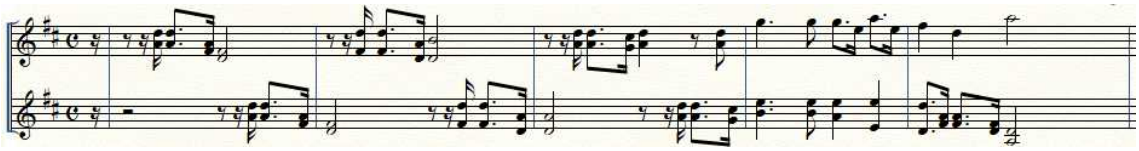
そして、BWV1066 と BWV1069 の共通点、木管（ダブルリード）のトリオの存在。２曲のトリオで納得のいく演奏が得られなかったから、後の２曲ではカットしたのか。

以上の点から考えてみると、まず、BWV1066 のハ長調で様々な舞曲６曲にオリジナルの序曲を加えた。次に、曲数を減らし、BWV1069 のニ長調を作った。ともに、ダブルリードのトリオを入れた。（逆は少々考えにくいように思う。）いずれも、小オーケストラ向きで、ヴァイマルかケーテン時代だ。その後、弦楽合奏で BWV1068 と BWV1067 を作ったのだが、BWV1067 完成後上手なオーボエ奏者がいたので、ロ短調にし、ソロを演奏させた。その後、ライプチヒ時代に、大オーケストラのために金管・打楽器を加えた。

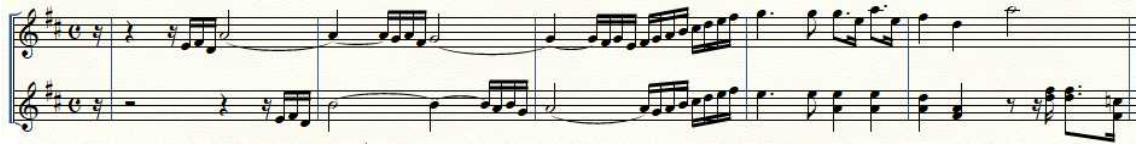
ということで、BWV 1066 C-dur → 1069 D-dur → 1068 D-dur → 1067 h-moll、と素人ならではの仮説を唱えたいと思います。みなさんはいかがお考えですか？　Don't think, feel![*8]

・序曲　ニ長調 4/4 - 3/8 - 4/4

ニ長調を表すリズム付きの低音が力強く響き渡り、曲が開始する。そこに、



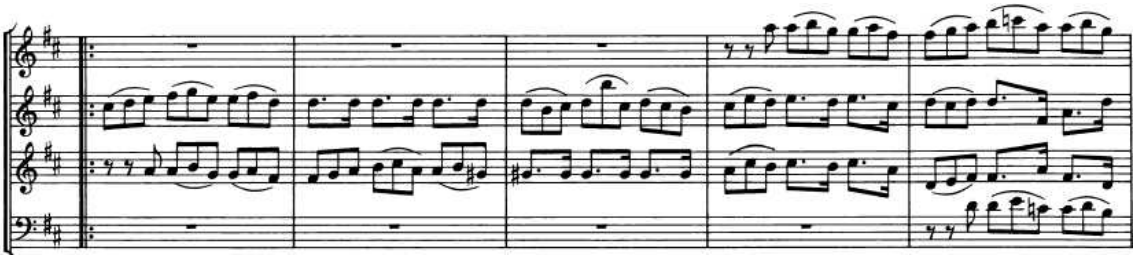
同様のリズミックな付点音符の下降音型がオーボエと 2ndVn,Va とで掛け合う。そこに、



幕開けを表すようなメロディが oboe1st と Vn1st で掛け合っていく。

中間部は８分の９拍子で、３連符の３拍子のような形を oboe2nd と Vn2nd が先発する。

バッハ得意のフーガで、oboe3rd と Va が次発、３小節過ぎて oboe1st と Vn1st、そして、低音（Fg とチェロ＆バス）が追いかける。

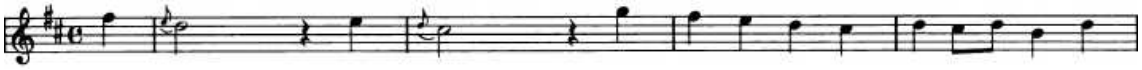


壮大なフーガが終わると、再び冒頭の４拍子に戻り、前奏曲（overture）は終わる。

・ブーレ Ⅰ　2/2 （楽譜は C すなわち 4/4 となっているが…）（以下同じ）

オーボエのメロディと通奏低音の動きに、Vn ＆ Va が合いの手を入れる。後半は、Ob と Vn の役割が交代し、ブーレ I は終わる。

・ブーレ II　2/2



オーボエ 3 本によるメロディに、VnVa の 16 分音符の掛け合いが入る。

そこに、ファゴットの 8 分音符の流れるような動きが加わる。

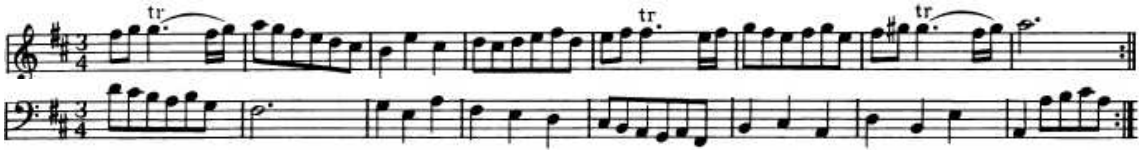
ブーレ I に戻って終了。

・ガヴォット 2/2（楽譜はCすなわち4/4となっているが…）（ブーレに同じ）

オーボエ、Vn&Vaのメロディと通奏低音の分かりやすい舞曲。

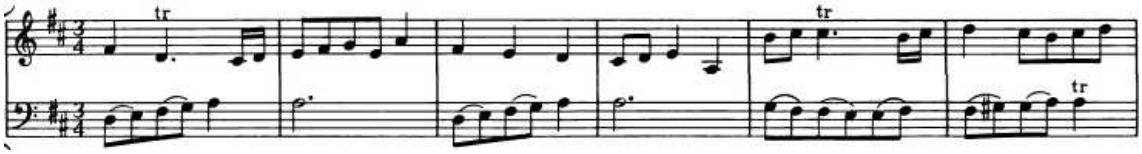
・メヌエットⅠ 3/4

ガヴォット同様、メロディと通奏低音の分かりやすい舞曲。

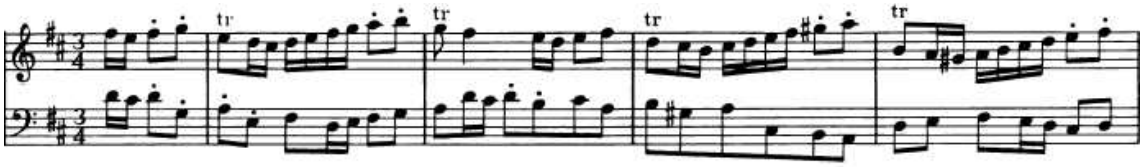


・メヌエットⅡ 3/4

弦楽合奏となり、メヌエットⅠに戻って終わる。



・レジュイサンス 3/4



軽快な３拍子の舞曲。華々しく終了し、曲全体を締めくくる。

脚注

*5 シューベルトについては、楽譜で、クレッシェンドを長めに書く癖があって、アクセントをディミヌエンドとして演奏していた。私自身も、その演奏を先に聞いたもので、アクセントの演奏を初めて聞いたときには「違和感」があったのだが、そういうものだと思って聞くと、すぐに慣れるし、これが彼の音楽なんだな、と思えるようになった。（また覆すような発見があったらどうしよう(笑)）

*6 まだお聞きになってない方はぜひお聴きになってください！（Youtubeにもあります。）
原典復刻版のCDとしては2002年のNova Stravaganza, Siegbert Rampe、2010年の Il Fondamento, Paul Dombrechtがある。

*7 Ensemble Sonnerie, Monica Huggett「Orchestral Suites for a Young Prince」2009年

*8 と言われても、豊かな感性がないと全く意味がないばかりか、むしろ逆に作用することもある。豊かな感性は、豊かな経験に基づくことは言うまでもない。狭い経験から豊かな感性は生まれない。経験が知識となり蓄積されるわけだから、経験し、考え、発展させ、そして、感じることが重要なのだ。

Franz Joseph Haydn　フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

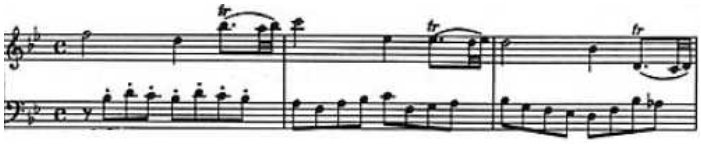
1732 年 3 月 31 日、オーストリア大公国（当時）ニーダーエスターライヒ州ローラウ村に生まれた。1809 年 5 月 31 日ウィーンにて永眠。弟ミヒャエル・ハイドンも作曲家として有名。数多くの交響曲、弦楽四重奏曲を作曲し、交響曲の父、弦楽四重奏曲の父と呼ばれている。弦楽四重奏曲第 77 番（第 62 番）の第 2 楽章にも用いられた皇帝讃歌『神よ、皇帝フランツを守り給え』の旋律は、現在ドイツ国歌（ドイツの歌）に用いられている。

ハイドンの交響曲といえば、104 曲というのが長い間の「常識」だったが、1792 年に作曲された協奏交響曲に第 105 番が付けられ、第 106 番二長調、第 107 番変ロ長調（間違って弦楽四重奏に分類されていた）、第 108 番変ロ長調が加えられた。

交響曲第 108 番 変ロ長調 B-dur

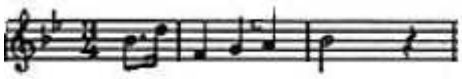
この曲は 1769 年にパリで出版された。ゲットヴァイク修道院が 1765 年に購入した筆写譜があるのだが、作曲年代は明らかでない。モルツィン伯爵に仕えていた時代（1757-1760 年頃）の作品であるとランドンはみているが、ゲルラッハは 1762 年の作品とみている。２楽章のファゴットの独奏を見ると、エステルハージ家副楽長時代（1761-1763 年）であると考えられる。いずれにせよ、交響曲の「進化」の過程であることがわかる曲である。

第 1 楽章 Allegro molto　4/4 拍子、ソナタ形式。



ヴァイオリンとオーボエによる第 1 テーマで始まる軽快な曲。48 小節の短い曲。

第 2 楽章 Menuetto: Allegretto - Trio



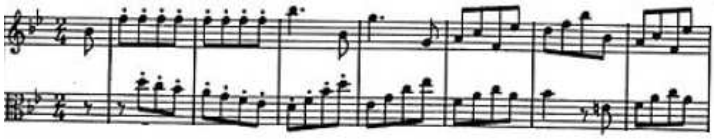
アウフタクトで始まる軽快なメヌエットである。弦楽器に→管楽器と掛け合って進んでいく。

トリオは下属調の変ホ長調（Es-dur）に転じ、ファゴットの独奏が入る。冒頭のメヌエットに戻って終わる。

第３楽章 Andante　ト短調、6/8 拍子、ソナタ形式。

平行調のト短調（g-moll）となり、弦楽合奏。2ndVn がテーマを奏で、フーガ風に進行していく。

第４楽章 Finale: Presto　2/4 拍子、ソナタ形式



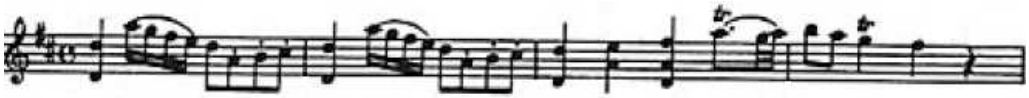
軽快な終楽章。1 楽章のアレグロに対しプレストで。両 Vn の 16 分音符で締めくくる。

交響曲第４番 ニ長調 D-dur

この曲は、自筆楽譜は残っていないが、フュルンベルク・コレクションに信頼性の高い筆写譜が残っており、エステルハージ家以前、モルツィン伯爵時代（1757 年-1760 年ごろ）の作品であると考えられる。初期に多く見られる急ー緩ー急の 3 楽章構成。

交響曲第４番と言えば、ベートーヴェン、チャイコフスキー、ブラームスなど、印象的なものが多い気がするが、このハイドンの４番も、あまり評価されない初期の交響曲の中、なかなかよいと思う。（個人的な感想です。）

第１楽章 Presto　4/4 拍子、ソナタ形式

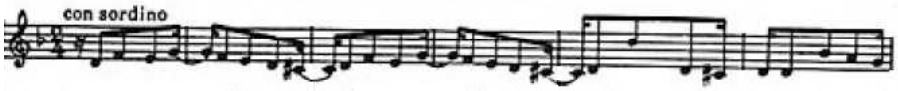


提示部では型どおりイ長調に転調した後に、9 小節にわたるイ短調の部分を経る。

第２楽章 Andante　ニ短調、2/4 拍子

弦楽器のみで演奏される。低音の八分音符の動きに、

2ndVn がシンコペーションで呼応し、



1stVn がメロディを奏でる。

（楽章終わりの 2 小節の安堵感（？）がいい！？）

第３楽章 Finale: Tempo di Menuetto　3/8 拍子 ソナタ形式

メヌエットと言えば、A-B-A、中間部である B は「トリオ」、という形式であるので、Tempo di Menuetto、すなわち、「メヌエットのテンポで」という速度表示な訳である。しかも８分の３拍子も面白い。（108 番の 2 楽章参照）

再現部の手前の消えゆくような弦楽器の pp とホルンのロングトーンが印象的。

Wolfgang Amadeus Mozart ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

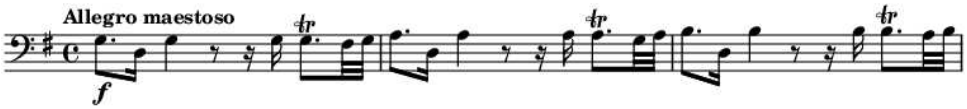
1756 年 1 月 27 日ザルツブルク生まれ。３歳からチェンバロを弾き始め、5 歳のときに最初の作曲を行う（アンダンテ ハ長調 K.1a)。交響曲第 1 番は 1765 年 2 月 21 日初演、８歳の時[*9]。1791 年 12 月 5 日没。35 歳であった。晩年の次の言葉をぜひ紹介したい。

「ヨーロッパ中の宮廷を周遊していた小さな男の子だったころから、特別な才能の持ち主だと、同じことを言われ続けています。……中略……長年にわたって、僕ほど作曲に長い時間と膨大な思考を注いできた人はほかには一人もいません。有名な巨匠の作品はすべて念入りに研究しました。作曲家であるということは精力的な思考と何時間にも及ぶ努力を意味するのです」[*10]

交響曲ト長調 K.A.221（45a）"Old Lambach"

1769 年 1 月、モーツァルト一家はザルツブルクからウィーンへと向かう旅の途中、北オーストリアのランバッハ寺院に寄った。その時のおもてなしに対する返礼として贈った曲の 1 つがこのト長調交響曲である。『新ランバッハ』もあるのだが、これは父レオポルトの作。『旧ランバッハ』には初稿と第 2 稿があるのだが、今回は第２稿を演奏する。[*11]

第１楽章 アレグロ・マエストーソ ト長調 4/4 拍子 ソナタ形式

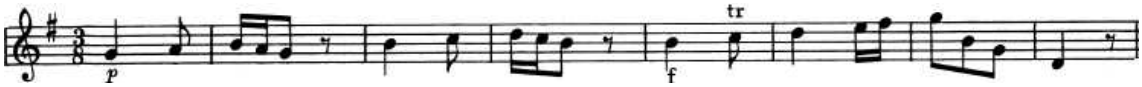


第１主題を低音に持ってきている。その後ヴァイオリンに移り、進行していく。リズム、メロディ、ハーモニーの主要素がちりばめられている実は難しい曲である。

第２楽章 アンダンテ ハ長調 2/4 拍子 ソナタ形式。

ハ長調となり、軽快に進んでいく。オーボエはお休み。ホルンのハイトーンが難しい。再現部の手前、2ndVn の「ジュピター」が嬉しい。

第３楽章 プレスト ト長調 3/8 拍子 ソナタ形式



初稿ではモルト・アレグロだったのだが、第２稿ではプレストになった。軽快に演奏したい。展開部冒頭では「フィガロの結婚「序曲の冒頭のような。

（ホルンの頭打ちがガムランのカジャールのように思えるのは私だけ？）

*9「年齢詐称疑惑」もあるが、幼少であることには変わりはない。（レオポルドの示唆の「噂」あり？）

*10 ドノヴァン・ビクスレー『素顔のモーツァルト』清水玲奈訳、グラフィック社、2005 年

*11 交響曲第 40 番も初稿と第２稿がある。初稿はクラリネットなし。どちらが好みですか？

Vn solo & コン・ミス　藤本舎里

３歳より才能教育研究会にてヴァイオリンをはじめる。東京藝術大学を経て、同大学院修了。全日本学生音楽コンクール大阪大会小学校の部及び高校の部第 2 位。五十嵐由起子、澤和樹、景山誠治、故ゲルハルト・ボッセ各氏に師事。川口市芸術奨励賞受賞。アマチュアオーケストラとの協奏曲共演の他、国内オーケストラや室内楽、ソロなど様々な分野で活動。後進の指導にもあたっている。奈良県出身、川口市在住。

オーボエ・指揮　山口尊実

埼玉大学教養学部教養学科卒業。幼少よりピアノを始め、小学生でトランペットを始める。中学の管弦楽部でオーボエに出会い、以後オーボエを続ける。宮本文昭、シェレンベルガー、茂木大輔、ルルー各氏らの演奏会や公開レッスンに足繁く通う傍ら、斎藤享久、渡辺克也、荒絵理子各氏らに師事。楽器：Oboe:LF、English Horn:Bulgheroni
趣味：S660、virago1100、Mono-ski、ScubaDiving（Resuce Diver）、筋トレ、バドミントン etc.

member 敬称略

vn 1st	藤本舎里、伊藤温子、渡邉昭子	ob	大倉淳、大山明子、原愛
2nd	大西由梨、豊島美紀	hr	林義昭、松沢宗一郎、伊藤綾子
va	高橋良暢	cond, ob	山口尊実
vc	大和伸明		
cb	森田章		

◎団員募集しております。　詳細はＨＰにて！

第５回演奏会のお知らせ

2021 年 春（未定）　　リリア音楽ホール（予定）　　※決定次第 HP に掲載します！

曲目（予定）

J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンソナタ第 1 番より Fuga
T. Albinoni 二本のオーボエのための協奏曲 in F 9-3
A. Vivaldi 「和声と調和の試み」より 第 1 番 ホ長調 RV 269「春」（「四季」より）
F. J. Haydn 交響曲 25 番 in C、交響曲第 22 番 in Es「哲学者」
W. A. Mozart 交響曲ト長調 K.45b（K.A.214）（55 番）

HP：kce.saitama.jp　　mail：bur@kce.saitama.jp